

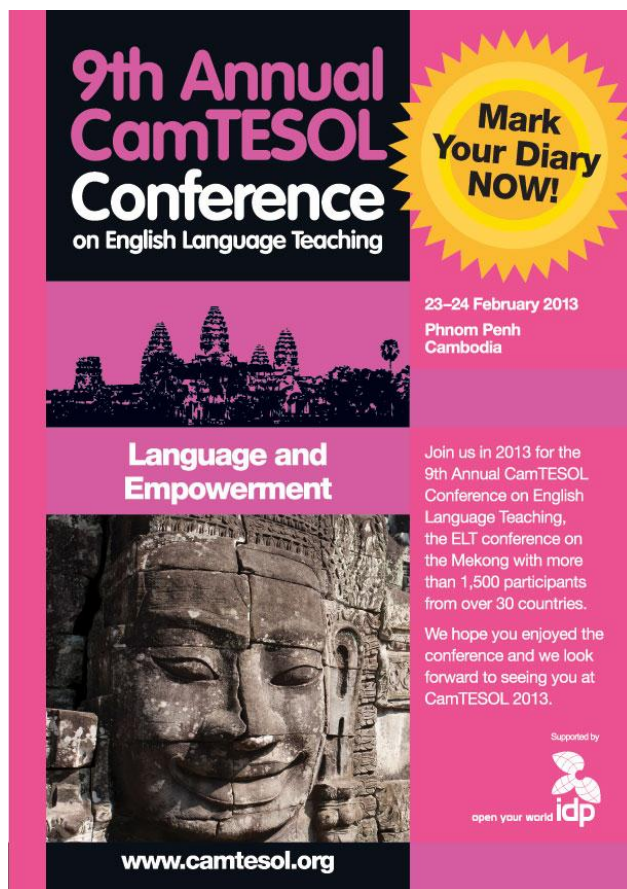
# e-dream-s 通信

No. 140 発行：2013年2月10日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

e-dream-s 通信 2月号をお届けします。お楽しみください。

## 目次

- |   |       |         |
|---|-------|---------|
| 1. CamTESOL 2013 ツアーの成功を                      | 中川 房代 | p.2~3   |
| 2. 同窓会  | 辻 荘一  | p.4~5   |
| 3. 異文化コミュニケーション：Implicit & Explicit Knowledge | 井川 好二 | p.6~12  |
| 4. 英語教師にとっての ESD (2)                          | 塚本 美紀 | p.13~14 |



Conference Flyer CamTESOL Conference HP より

## CamTESOL 2013 ツアーの成功を

中 川 房 代

カンボジアでの英語教育学会 CamTESOL 2013 の開幕まであと 2 週間となった。カンファレンスで発表される会員の皆さんは、今準備の最終段階で忙しくされていることと思う。

先日、カンファレンスのプログラムがホームページ上で発表され、ACROSS / e-dream-s の皆さんの発表日時は以下のように決定した。

2月23日 (土)

11:15 - 11:45 Yuzuru Haida

"Using visual and audio aids for interactions in an English classroom"

11:55 - 12:25 Koji Igawa

"Language proficiency development needs"

13:15 - 13:45 Hiromi Inagawa & Brian Nuspliger

"Say it loud and clear: Say it loud and clear"

16:15 - 16:45 Naoko Tsujioka & Miki Tsukamoto

"Teaching English through English in EFL settings: Problems and prospects"

今回の発表は 4 本、2008 年の初参加から 6 年連続での参加である。

年々発表の数が増え、盛況に開幕を迎えることは間違いない。多くのカンボジア人やその他の国からの参加者と英語教育について意見交換や交流をする本当に素晴らしい機会だ。

今年のテーマは、“Language and Empowerment”。日本でも、特に行政や NPO、教育の分野で、この「エンパワーメント」という言葉がよく聞かれるようになった。“正確な意味はよくわからないが、今はやりのポジティブな言葉”の 1 つとして一般に受け取られているように思う。

ネットで少し調べてみると、

エンパワーメントとは、20世紀を代表するブラジルの教育思想家であるパウロ・フレイレの提唱により社会的な意味で用いられるようになり、ラテンアメリカを始めとした世界の先住民運動や女性運動、あるいは広義の市民運動などの場面で用いられ、実践されるようになった概念である。

エンパワーメントの概念が焦点を絞っているのは、人間の潜在能力の発揮を可能にするよう平等で公平な社会を実現しようとするところに価値を見出す点であり、たんに個人や集団の自立を促す概念ではない。<sup>1</sup>

とある。

浅いかもしれない私の理解では、言葉の学習・獲得が社会の発展に寄与する。その過程を作るのが教育であり、それを担うのが、学校や NGO/NPO などの運動体なのかな、と。その意味で、私達の行ってきた CamTESOL での発表と英語教科書や音声教材の支援は、この趣旨に沿っている。運動体である ACROSS・e-dream-s と同じ方向をめざしていると思う。

今回は、教育支援の1つとして、e-dream-s がスポンサーとなって、カンボジアの英語の先生の CamTESOL 参加を支援する。こちらも初めての試みであるが、一人でも多くのカンボジアの先生に、この素晴らしいカンファレンスに参加して欲しいものである。

カンファレンス後には、教科書支援や音声教材支援をした学校訪問や、Sokhom 理事を始め、Ponleu さんなどこれまで一緒に活動してきているカンボジアの方々とのミーティングなども予定されている。来年度の教育支援を実施する学校の選定等、今後の方向性を確認する大切な仕事もしてきてくださることになっている。また、カンボジアの後、隣接するラオスにも訪問し、カンボジアを外部から見る機会も持つことになっている。その成果も楽しみだ。

CamTESOL に行ってください 6名の皆さんには私達の代表として頑張ってきて欲しいと思うし、私達の活動が国際社会の発展に寄与するのだという自負を持ちながら、日本からしっかりエールを送っていきましょう！

---

<sup>1</sup> <http://ja.wikipedia.org/wiki/エンパワーメント>

## 同窓会

辻莊一

コラムニスト小田嶋隆は言う<sup>2</sup>。

「友だちは、学校という施設の副産物だったのかもしれない。」

職場の同僚や、行きつけの飲み屋で顔を合わせる知り合いの中に、親しい人間がないわけではない。が、彼らが『友だち』なのかというと、ちょっと違う。なにより利害関係や上下関係が介在している。ということはつまり、社会に出た人間は、原則として新しい友だちを作れなくなるということだ。

そうかもしれない。少なくとも、義務教育という制度が日本に導入されて以降、「友達」の概念を学校と切り離して考えることは非常に難しいとはいえるだろう。

私にも少ないながら（相手がどう思っているかは知らないが）友達といえる人間はいる。そして彼らはたしかに学校の同窓生である。

その友だちが集まる同窓会というものがある。とくに M 高校の 3 年生の同窓会は、熱心に幹事をしてくれる何人かの人達がいて定期的に行われている。当時の担任の先生もしばしば顔を見せてくれる。たまにしか顔を出さないが、行けば楽しく過ごすことができる。だがよく言われる「いくら時間が経っていても顔を合わせれば、互いに昔の自分に戻る」ということはない。

さらにいうならば小学校や中学校の同窓生のことは数名を除いてほとんど覚えていない。たぶん今会っても分からないだろう。大学は HR もないゆるい関係のところ、やはり交流があるのはごく数名である。

どうも学校という施設は、私には友達という副産物を多くは産んでくれなかったようだ。これはおそらく私が小学校から大学生までの学生時代、だらだらと薄い学生生活を送っていたせいだろう。友達が少ないのも、同窓会で盛り上がらないのも当然である。

---

<sup>2</sup> 日刊サイゾー 友達リクエストの時代【第3回】

社会に出た人間は新しい友だちを作ることができない!? 友だちとは"学校"の副産物なのだ [http://www.premiumcyzo.com/modules/member/2013/01/post\\_3908/](http://www.premiumcyzo.com/modules/member/2013/01/post_3908/)

そんな私が、最近初めて盛り上がる同窓会を体験した。私にとって教員になって 2 校目、当時新設校だった S 高校の元同僚たちである。もちろん全員ではなく 1 期からだいたい 5、6 期当たりの気の合った教員同士の集まりである。当時から 30 年を経ているのだが、みな年をとったものの集まった十数名の人柄や印象は当時と全く変わっていない（ように少なくとも思える）。あんなこともあったこんなこともあったと語り合ううちに、人間関係も当時に戻っていく。

私は 29 歳から 38 歳まで 10 年間勤務した。今から思えば馬鹿なことも山ほどしたが、学んだこともたくさんあった。そして、教師なんかいつでも辞めてやると思っていた私が、このままずっと教師でもいいかなと思ったのはこの S 高校に赴任して数年後のことである。

帰宅後、はたと思いついたのは、学生時代に学生として正しい生活を送らなかった私にとって、この S 高校が教師としての「学校」だったのだということであった。

# 異文化コミュニケーション： Implicit & Explicit Knowledge

井川 好二



*San Rafael* にある大学のマリア像<sup>3</sup>

「センセ、こっちの人で、私が泣いてる顔真っすぐ見て、大丈夫やで、心配せんでええよって、眼え見て言うてくれはるんやね。めっちゃ感激したわ」

2月の初め、米国カリフォルニア州サンフランシスコ市郊外にあるサンラファエル市<sup>4</sup>に、勤務校の学生24名を引率。提携している小さなカソリック系大学での語学研修とホームステイの一月間のプログラムが始まった。

---

<sup>3</sup> Photo by Koji Igawa, Feb., 2011

<sup>4</sup> San Rafael [*san rə'fel*] a city in northwestern California, on San Rafael Bay, north of San

大学生と言えども生まれて初めての海外組が多く、一月も親元を離れるのもいままでしたことなかったと言うのもいる。ホームステイ先でのコミュニケーションがうまくいかなかったり、食事が合わなかったり、現地でのテストの結果振りわけられた語学研修のクラスのレベルが高すぎたり低すぎたり。問題はいろいろと起こるのである。しかし、それぞれの「問題」からしっかり学んで欲しいものである。



Golden Gate Bridge を越えてマリナー郡を臨む<sup>5</sup>

英語学科2年生Hの場合、研修2日目に、バスを降りてからホームステイに帰る道が分からなくなった。1時間近く彷徨ってようやく公衆電話を見つけてホストファミリーへ電話。ホストマザーが車で迎えに来てくれた。涙で化粧がボロボロになって、“I’m sorry. I’m sorry.” としか言えなかったHに、ちゃんと眼を見て話してくれたホストマザーに感激した。

「言うたこと私がホンマにわかってるかどうか、ちゃんと眼でみて確認してくれはる。日本では、人が泣いてる顔は見んようにして、『大丈夫？』って訊くだけやど、真っすぐ見られて、『大丈夫！』って言われた方が安心する。ホンマに私のこと気にしてくれてるんやって思った」

そう言われてみるとなるほど、アメリカ人は相手の眼をみて話すことが多いのかも知れない。特に相手が子どもの場合、しっかり向き合って、眼を見て話すことが多いのかも知れない。

---

Francisco; pop. 55,602 (est. 2008). (OAD)

<sup>5</sup> [http://www.marinvacation.com/marin\\_scenery](http://www.marinvacation.com/marin_scenery)



*Mission San Rafael*<sup>6</sup>

Speech や Presentation などでは、eye contact<sup>7</sup>が大切だと、口を酸っぱくして言う。しかし、日常会話でもそうだとは、あまり思ったことはなかった。はっきり言ってしまえば、長年英語を教えてきて、アメリカに住んでいたこともあり、何回も学生を連れてきてプログラムをやってきたのに、恥ずかしながら、そういうアメリカ人の言語習慣を意識することはなかった。

「エエ勉強したね。自分だけの経験。みんながそれぞれ自分だけのアメリカを経験する一月間や」

思えば、自分自身の経験として、アメリカ人の前で、顔がボロボロになるほど泣いたこともないし、真っすぐ向き合って慰められたこともない。

もし H の観察が正しく、相手の眼を見て話すことが、アメリカ社会における BICS<sup>8</sup>の基本

---

<sup>6</sup> <http://www.marineconomicforum.org/san-rafael/>

<sup>7</sup> eye contact: the act of looking directly into one another's eyes: make eye contact with your interviewers. (OAD)

<sup>8</sup> Basic interpersonal communicative skills (BICS) are language skills needed to interact in social



であるとすれば、私が自然にできるかどうかは別にして、英語によるコミュニケーションを教える立場の人間として、アメリカ社会ではこういう場合には眼を見て話すのが普通であると意識化し言語化し、「自家製シラバス」の一つとして頭の引き出しに入れてあっても不思議はなかったのであるが・・・

つまり、この件に関して、私は英語コミュニケーションの教師として、Implicit Knowledge も持ち合わせていなかったし、Explicit Knowledge もなかったと言える。

Ellis (2005)<sup>9</sup>によると、Implicit Knowledge (暗黙知) とは、

Implicit knowledge is procedural, is held unconsciously and can only be verbalized if it is made explicit. It is accessed rapidly and easily and thus is available for use in rapid, fluent communication.

Explicit Knowledge (形式知) とは、

Explicit knowledge 'is the declarative and often anomalous knowledge of the phonological, lexical, grammatical, pragmatic and socio-critical features of an L2 together with the metalanguage for labelling this knowledge' (Ellis, 2004). It is held consciously, is learnable and verbalizable and is typically accessed through controlled processing when learners experience some kind of linguistic difficulty in the use of the L2.

例えば、三人称単数現在の S は、多くの日本人にとっては、Explicit Knowledge であるが、Implicit Knowledge ではない。英文法の時間になぜ “She like cats.” が間違っているかを説明することはできるが、話す時にできるかと言えば、まことに怪しい。

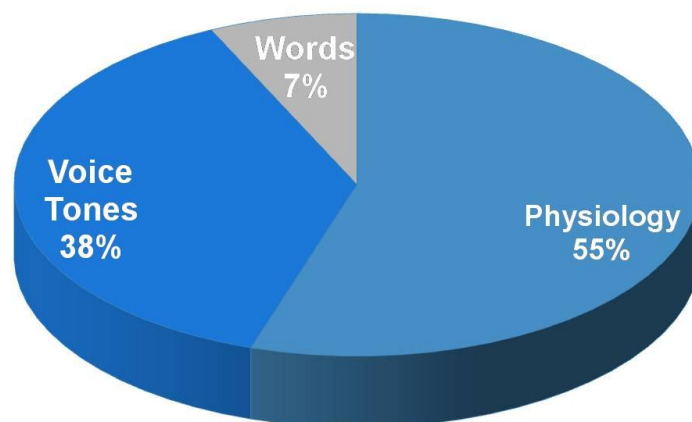
さらに身近な例を挙げれば、自転車に乗ることができるのと、自転車の乗り方を説明できるのは別の知識である。むろん、乗ることが Implicit、説明することが Explicit な Knowledge である。

---

situations, for example, when speaking to a friend on the telephone. BICS refers primarily to context-bound, face-to-face communication, like the language first learned by toddlers and preschoolers, which is used in everyday social interaction.

We use this language skill in face-to-face interactions, rather than in dealing with academic tasks. (Wikipedia)

<sup>9</sup> Ellis, R. (2005). Principles of instructed language learning. *Asian EFL Journal*, 7(3), Article 1. [electronic version]



*Research has shown that 93% of communication is non-verbal<sup>10</sup>:*

*Physiology<sup>11</sup> (55%), Voice Tones (38%), & Words (7%)*

語学として、つまり英語学習の観点から言えば、文法や語法や単語などの知識を、どうすれば学習者が、**Explicit** なばかりでなく、**Implicit** なものとして身につけることができるかが大きな課題である。文法も単語も実際のコミュニケーションで自然に使えるようになってほしい。むろん、それを教える教師も **Explicit** な知識を振り回すだけではなく、**Implicit** な知識を自然に使って、学習者の良き見本となるよう努めるべきである。

しかし、異文化コミュニケーションの観点では、例えば、日本人にとって異文化であるアメリカ社会・文化におけるコミュニケーション・パターンのすべてを **Implicit Knowledge** にする必要があるかと言えば、そうとも限らない。**Explicit Knowledge** だけで事足りる場合もあるのである。

特に、ジェスチャー、表情、態度など、異文化コミュニケーションの大きな要素は、学習者のアイデンティティと関わる部分なので、**EFL** 環境での学習ではなおさら、**Explicit Knowledge** のままで良いと考えられる。英語を話しているからといって、やたらと肩をすくめる必要もないし、ハグを強要するのもおかしい。異文化コミュニケーションの相手の、コミュニケーションのスタイルにこうした特徴があると知っていることで十分な場合が多

<sup>10</sup><http://www.maximumadvantage.com/nonverbal-communication/non-verbal-communication-demonstration.html>

いのである。

「アメリカ人は泣いている人の眼を見て話す」は、**Explicit Knowledge** を持ち合わせていれば充分かもしれない。少なくとも、日本で英語コミュニケーションを学んでいる場合は、そうであると言える。

アメリカに学生を連れて行く前に、いろいろな異文化コミュニケーション対応研修をするのだが、そのひとつに「ドア研修」がある。

アメリカでは建物や部屋に入る時、先に歩いているものが後ろの人のために、開けたドアを手で押さえて待っていることになっている。むろん、次の人が遙か遠くである時はこのルールは適用されないが、すぐそこにいる場合は、必ず押さえないといけない。

日本で学んでいるだけなら **Explicit Knowledge** で充分であろう。しかし、アメリカに行けばしばらく暮らすとなると、このルールを **Implicit Knowledge** した方がアメリカの暮らしが楽になる。「**Ladies First**」の国であるアメリカへ行く日本男子は特に、しっかり学ぶべき知識である。

アメリカでは、**Door** が文字通り “**Gatekeeper**<sup>12</sup>” の役割を果たしているのである。

こうした異文化に関する知識を、**Explicit** なものとして伝えるシラバスや、**Implicit** なものにするための手段を数多く持ち合わせた英語教師になりたいものである。

「昨日はちゃんと帰れたよ、センセ」

次の日、元気な顔で **H** が言う。彼女にとって、アメリカのバスに乗ることも **Implicit Knowledge** になりつつあるらしい。

今回は、語学教師としての基本を、学生に教えてもらったアメリカ研修なのである。(サンフランシスコにて)

---

<sup>11</sup> the way in which a living organism or bodily part functions: the physiology of the brain. (OAD)

<sup>12</sup> a person or thing that controls access to something: the primary-care doctor serves as the



### Cross-Cultural Communication<sup>13</sup>

(Saturday, February 9, 2013)

---

gatekeeper to specialists. (OAD)

<sup>13</sup><http://www.martapuigsamper.com/en/wp-content/uploads/2012/12/crosscultural-boosters1.jpg>

## 英語教師にとっての ESD（2）

塚 本 美 紀

持続発展可能な社会について考えるには、ある一点からだけではなく全体から眺める姿勢が必要だと考えます。そのため ESD の学び方には、自然や社会の中での「体験」や人々との「つながり」による学びを基盤にする取り組みが見られます。習得した知識や技能を課題の解決に使う場面を設けることで、それらの知識や技能を活用する能力を身につけるだけではなく、実際に課題に取り組む場で足りない知識や技能に気づき、それが学習へのさらなる動機付けになるという場面を私自身もたくさん見てきましたし、同様の報告も多くあります。

「英語」という教科で考えるならば、机の上で学ぶだけではなく、実際の場面で、あるいはなるべくそれに近い場面で使用する機会を設けることで、英語の習得につながると同時に、英語を使えたという喜びやもっとできるようになりたい気持ちがさらなる学習へとつながっていくということですが、このことは多くの皆さんが教師の立場からも学習者の立場からも、実際に体験なさっていることなのではないでしょうか。

ESD は「環境」という面から語られることが多く、もちろん持続発展可能な社会のためにはそれは大変重要なことではあります。遠く離れた地域の人々、あるいは遠い未来の人々の「環境」を想像したり、受け入れたりするには、「英語」の授業の中で育むことができる異なる文化を理解しようとする姿勢が大切だと考えます。そして何より、日本以外の人々と持続発展可能な社会について考えるためには英語が不可欠で、ESD で「英語」という教科が果たす役割を大きいと考えます。

2011年から日米 ESD 交流プログラムがスタートしました。日米からそれぞれ24名の小学校、中学校、高等学校の教員が参加し、日本人教員は4月から5月にかけて約2週間米国に滞在し、米国人教員は6月から7月にかけて約2週間日本に滞在します。その間、参加教員は訪問国で教育や文化についてのセミナーに参加したり、学校訪問やホームステイを体験したり、ESDに関する会議に参加したりします。また、帰国後には日米の教育交流を目的とした共同プロジェクトを計画し実施することとされています。現在の参加者及び過去の参加者はメーリングリストで活発に情報のやり取りをしていますが、使用言語が英語のため米国人教員が中心のやり取りになっています。もちろん英語以外の教員もやり取りに参加してはいますが、英語の教員が活躍出来る場面がたくさんあるのではないかと思います。残念ながら来年度の募集は締め切られましたが、毎年12月から1月にか

けて参加者を募っています。実施要項及び参加申込書は各学校にも郵送されていますが、インターネットでも手に入れることができます。来年、参加を検討されてはいかがでしょうか。



<編集後記>

表紙に CamTESOL2013 の flyer を載せました。中川副代表理事も紹介しておられるように、今年のテーマは “Language and Empowerment”。世界中の研究者・実践者がカンボジアに集まり、英語を教える/学ぶことを社会的な視点で共に考える会になるのだな、と想像しています。今年も e-dream-s のメンバーがこの学会に参加し貢献することを誇りに思い、エールを送りましょう。 (道面和枝)